

# 葬送の教室

詩森ろば

川路孝生

娘を日亜航空の事故で亡くした企業の研究者

酒見健介

日亜航空 健康対策本部 部長

岩沼信一

妻を事故で亡くした職工

拝島 修

日亜航空社員 山の整備に従事

松尾繁行

日の出新聞 記者

津村 巧

息子を亡くした遺族

桑原哲治

日亜航空 かつて世話役に従事

工藤智紀

神代村の民宿の息子

宇和田芳江

医師

津村久美子

津村の妻

黒崎恵理

日亜航空に勤務していた姉を事故で亡くした遺族

ミーティングルームらしき場所。

原稿らしきものを整理している酒見健介。

そこに入ってくる川路孝生。

酒見、川路に気づき。

酒見 ああ。来てましたんですか。

川路 はい。お招きいただいて。

酒見 光栄です。川路さんに立ち会っていただけなのは。

川路 説明は酒見さんがされるんですか。

酒見 ええ。ずっとというワケにはいきませんが、第一回はわたしがやろうかと。

川路 いまさつきザツと拝見しましたよ。

酒見 ああ、展示ですか。

川路 ええ。

酒見 見せられるものは、あれで全部です。

川路 ……そうですか。

酒見 ええ。ずいぶんと喪ってしまいました。いや。捨ててしまったというべきか。

川路 そう。捨てた。捨てさせてしまった。

酒見 ……ずいぶんお待たせして。

川路 ええ。待ちました。ずいぶんと待ちましたね。

酒見 ……はい。

川路 足りない分は、あなたの言葉で。

酒見 責任重大です。

川路 ええ。それは。

酒見 プレッシヤーをかけないでください。

川路 プレッシヤーをかけに来たんです。

酒見 はは。厳しいな。相変わらず川路さんは。

川路 期待していますよ

酒見 いざとなったら真白になりそうだね。

川路 しっかりしてください。

ふたりやや笑う。

酒見、前に進み出て説明を始める。

ゆっくりと暗転する。

「本日は、日亜航空 安全啓蒙センターの開設の日となります。群馬県、長野県との県境にあります神楽岳に、羽田発大阪行きの方が墜落し、520名の方が尊い命を落とされました。このセンターは、事故から21年目の本日・・・ようやく、そのまとまった記録を、日亜航空内部に展示し、今後の空の安全に役立てていくための施設となります・・・。日亜航空123便は、1985年8月12日、18時12分、定刻から12分遅れまして、乗客509名、乗員15名を乗せ出発しました。離陸してから12分30秒後、午後18時24分35秒、「ドーン」という激しい衝撃音が記録されています。18時24分57秒、油圧系統に重大な異変を認識、羽田への帰還を試みますが、アンコントロール状態に陥り、迷走。360度旋回の後、18時56分25秒、群馬県と長野県の境にあります神楽岳中腹の尾根に接触、大破しました。原因は・・・」

酒見の声が暗闇のなかで響く。

神代村 体育館の準備室。

夏。山深い山中の中学校の体育館。

明るくなると、岩沼健一が、コピー資料をホッチキス留めしている。

素朴な容貌にガッシリした体躯の年のころ40になるかならないかというかんじだ。そこに入ってくる津村巧。私服ではあるがサラリーマンと思われる。30代半ば。

津村 すみません……。ああ。手伝います。手伝います。

岩沼 大丈夫。もうすぐ終わるから。

津村 いや。やりますよ。あれ。川路さんは。

岩沼 なんか、コピーの追加が出て、役場のほうまでやらせてもらいに、車で。

津村 そうですか。

岩沼 不便だよね。

津村 そうですね。ひさびさに来るとこんな山の中だったかなって。

岩沼 あ。ひさしぶり？神代は。

津村 2年ぶりですね。去年はじめて一回もこられなくて。岩沼さんは毎年。

岩沼 ああ。うん。この時期にね。毎年。

津村 そうですか。

岩沼 記念日とかね、うるさい人だったから、来ないと叱られるんじゃないかと思って。

津村 記念日って・・・まあ。そうか。  
岩沼 あ。不謹慎か。記念日とか言ったら。  
津村 あ。いえ。  
岩沼 年の初めにカレンダーにたくさん赤丸をつけるのよ。中には思い出せない日もあ  
るわけ。プレッシャーでさ。  
津村 たまんないですねー。  
岩沼 そうなのよ。わかんないよねー。男にはそういうの。でもさ。  
津村 はい。  
岩沼 もうこれ以上は増えないんだな、と思うとき。  
津村 ……。そうですね。

ふたり、ホッチキスを止める。

津村 あれ。これ、ホッチキスで止めちゃっていいんですか。  
岩沼 え。なんで。  
津村 だって、追加くるんですよ。  
岩沼 ああ。そっか。  
津村 別で配布できるようなものですか。  
岩沼 ああ。いや。なんか間に挟み込むって……。  
津村 ……外しますか。  
岩沼 悪いね。

ふたり、外し始める。

津村 ほんとは毎年来たいんですけどね。  
岩沼 いや。それはさ。5年もたったら。なかなかね。  
津村 運転できないから交通費が馬鹿にならないというのも大きいんですけど……。  
岩沼 あれ。神代に来る経費なら出るでしょ。日亜から。  
津村 ああ……それはそうなんですけど……。精算をお願いしたことがなくて……。  
岩沼 え。どうして。  
津村 ぼくはそういうのは利用させてもらったほうが、と思うんですが……。  
岩沼 ああ。もしかして奥さんが嫌がるんだ……。  
津村 ええ……まあ。  
岩沼 なにじゃあ高崎からタクシー？  
津村 ええ。まあ。  
岩沼 掛かるよねえ。え。いくらくらい掛かるの。

津村 2万・・・くらいですかね。片道。  
岩沼 往復4万かあ。言つてよ。乗せるから。  
津村 まあでもそれも言い訳で。  
岩沼 え・・・。  
津村 なんか、来ると妻の調子が・・・。  
岩沼 え・・・じゃ今回は。  
津村 は。  
岩沼 奥さん。  
津村 ああ。来てます。  
岩沼 そう。  
津村 ちよつと休んでます。いま、民宿で。  
岩沼 大丈夫なの。ついてなくて。  
津村 ああ。はい。それは・・・。まあ。ぼくだけ来るつて言ったんですけど・・・。  
岩沼 まあでも来る気になっただけでも・・・ね。  
津村 そうですね・・・。  
岩沼 ・・・・しかしアレだね。ホツチキスっていうのは、止めるときは快調だけど、抜くのはタイヘンだな。  
津村 破けたりしちゃいますよね。あ・・・。  
岩沼 え。なに。  
津村 ココ、使うといいですよ。(ホツチキスの後ろを指す)  
岩沼 え。あ。ここ。  
津村 はい。ここで掬つて・・・。  
岩沼 ああ。ダメだなあ。俺。事務とかやったことないから・・・。  
津村 あれ。お仕事なんでしたっけ。  
岩沼 鉄工所。知りませんでしたっけ  
津村 ああ。お父さんのあとを継いだつて・・・聞きました。聞きました。  
岩沼 今時期はあつくて大変ですよ。

と、そこに入ってくる川路。50代。知的だが融通の利かない生真面目な風体である。

岩沼 あ。お疲れ様です。  
川路 すみません。抜けさせてもらっちゃつて。  
岩沼 無事、できましたか。  
川路 ええ。ああ。そうだ。  
岩沼 なんですか。  
川路 役場でお茶、いただきました。(缶を取り出す)

岩沼 おおっありがたい。

川路 あのへんじや自販機もないからって。あ。津村さんも。よかったら。

津村 え。いいんですか。

川路 もしろん。あれ・・・。

津村 ああ、外してたんです。挟み込むんですよね。

川路 わたしもやりましょう。

岩沼 すみません。

川路 いえ。

岩沼 あれ。でもこんなに必要ですか。

川路 あとで役場のほうで配る分もあるので。

岩沼 ああ。そうか。(お茶を開けながら) これね。開発がすごく大変だったそうなんです。知ってますか。

川路 へえ。

岩沼 お茶ってものすごい劣化しやすいんですって。なに。えーと。

川路 酸化ですか。

岩沼 ああ。はい。酸化。

津村 解決するまで10年くらい掛かりましたからね。

岩沼 10年ですか。

津村 缶に入れて蓋するときには組みがあるんです。

岩沼 はあああ。

川路 酸素を抜くのかな。

津村 はい。そうですね。

岩沼 へえ。

津村 そのあと、ペットボトルに入れるのがまたたいへんで。

岩沼 え。なんですか。

川路 缶と違って色が濁るのが目立つそう。

津村 ああ。なるほど。透明だから。

川路 だから、濾過して、濁らないようにしてるんですって。缶のとこれじゃ、色が違うらしいです。ちよっと。

岩沼 さすが飲料会社の営業マン。詳しいねえ。

津村 開発の苦労はわかりませんが、緑茶はなかなか手ごわいらしいです。うちもようやく商品化されるんじゃないかなあ。

川路 開発は、どうしたって地道なもんですからね。

津村 ええ。ほんとに。

岩沼 川路さんはバリバリ研究職ですもんねえ。

津村 何を研究してらっしゃるんですたっけ。

岩沼 ダイヤモンド。ね。そうですね。  
川路 ええ。人造のね。  
津村 え。エンゲージリングとかにするんですか。  
川路 いえ・・・工具用なんです。研磨とかに使用する。  
津村 ああ。硬度が高くないとだめなんですよね。  
岩沼 ダイヤモンドはダイヤモンドでしか削れないってね。一番硬いから。  
津村 イチから作るんじゃない、大変でしょうね。  
川路 アメリカではすでに開発してましたから、原理は解っていたんですが・・・。  
岩沼 え。どんなですか。  
川路 黒鉛を超合金の白に入れて5万気圧以上に圧縮し、1400度以上に加熱すれば  
いいわけです。  
岩沼 え・・・え・・・でもそれ、白が持ちますか？  
川路 解りますか。  
岩沼 いや。解りませんが、うち、铸造もやってますでしょう。その5万気圧って・・・  
川路 なんか天文学的ですけどね。ぼくらから言ったら。いくら超合金だったって・・・。  
岩沼 割れますね。  
川路 ああ。やっぱり。  
岩沼 何十万もする白が、一度の実験で壊れてしまうんですから・・・。途方にくれましたよ。  
津村 いやあ。お茶とはなんだか規模が違いますね。  
川路 最初に合成したダイヤモンドは顕微鏡で探さないと見えなかった。  
岩沼 え。え。顕微鏡ですか。  
川路 はい。小さすぎて。  
岩沼 え。でも最後は見事に。  
川路 ええまあ。  
津村 なにか特別な装置でも。  
川路 いや。最初と同じです。  
岩沼 え。それって。  
川路 多少は変更しましたが、原理は同じなんです。向上したのは・・・いわばちょっと  
したコツです。  
岩沼 コツって・・・。  
川路 铸造だってそうでしょう。同じ機械を使ったら誰でも同じようにできますか。  
岩沼 いやあ。だってそれは職人ですもん。腕の違いってもんがあります。  
川路 同じですよ。その「腕」と職人さんがいうような部分を、蓄積していくわけです。  
繰り返してできるように。それをぼくたちはノウハウと呼び、岩沼さんは腕と呼  
ぶ。その違いです。プラクティカル・イーजी・プラクティス、ですよ。

岩沼 え・・・プラ・・・。

川路 プラクティカル・アンド・イージー・プラクティス。小さくてかんたんなことから実行せよ、です。

岩沼 はああ。

津村 開発にいたる同期が同じようなこと言ってました。企業の研究は、ノーベル賞もらうためにやるんじゃない。ちよつとした方法を積み重ねて、うまくいくように工夫するのが仕事だって。

川路 結果、お茶が。

津村 はい。濁らず。

と、覗きこんでいる女性に一同気づく。

宇和田芳江である。年は40に手が届くくらいのところ。

川路 ああ。もしかして・・・。

宇和田 川路さんでらっしゃいますか。

川路 ええ。

宇和田 宇和田です。

川路 どうも御足労願いまして・・・。

宇和田 遅くなりまして申し訳ありません。

川路 いえ。宇和田さんが最初です。

宇和田 そうですの。

川路 ああ。ご紹介します。こちら宇和田芳江さん。高崎第一病院の外科に勤務されています。

岩沼 あ、お医者さんって・・・。

宇和田 え。

岩沼 いや。てつきり男の方かと。

宇和田 ああ・・・はい。まあ・・・そうですわね。

川路 今回はお引き受けくださって・・・。

宇和田 いえ。まだお引受けしたわけでは・・・。

川路 問題は、お気持ちですか。それともお立場ですか。

宇和田 ・・・・そうですね。お恥ずかしいですけど・・・両方でしょうか。

川路 お聞きしてもかまいませんか。

宇和田 (岩沼と津村を気にして) ここでお話しても大丈夫ですか。

川路 ああ。はい。彼らも中心メンバーですから。

宇和田 わたしのプロフィールはメンバーの方には事前に渡ってるんですよ。

川路 もちろんお渡ししています。



宇和田 でも・・・男性って・・・。

岩沼 あ・・・もちろんいただいてるんですが、すみません。勘違いしております・・・。

宇和田 ああ・・・それは・・・まあ、当時も、看護婦ではなく医者のお話を聞かせると言われたりしましたし・・・。

岩沼 思いこんじゃってたんですね。いや。ほんとにあいすみません。

宇和田 いえ・・・。

岩沼 そうですよ。看護婦さんも含めて・・・あれだけ女性が気丈に働かれてたのに・・・

宇和田 いえ、あの・・・。

岩沼 大事なバネリストの方なのに・・・いや。ほんとに。

宇和田 まだお引き受けしたわけではないので。

岩沼 それは、そのどうして。

宇和田 ・・・・聞いてらっしゃる方が、研究のために集まってきた方ばかりなら、いいのですが、もちろんご遺族の方もいらっしゃるんですよ。

川路 はい。そうですね。

宇和田 どの程度のことまでお話したらいいのか、イメージできないんです。どうしても。

川路 もう少し詳しく聴かせていただけますか。

宇和田 誤解のないように最初に申し上げますけど、ご趣旨には、全面的に賛成なんです。つまり、事故の検証は、もつと詳細にもつと丁寧に行い、次につなげていくべきだということ・・・。

川路 はい。

宇和田 それをお伝えするためには、あるとき行われていたことや、ご遺体の状況、なにによりわたしの考えについて、詳細に語ることに前提となりますよね。

川路 ええ。そうですね。

宇和田 あん・・・みなさん・・・ご遺族でいらっしゃいますね。

津村 (宇和田と視線が合い)・・・ええ。そうなりますが・・・。

宇和田 お聞きになりたいものなのでしょう。

津村 ・・・・いや・・・あの・・・。

宇和田 検死担当の医師のなかには、広島を体験したベテランもいらっしゃいました。その方は、焦土と化した広島に、20人ほどの軍医が入っていかれたそうです。その方はこうおっしゃっていました。広島は、夥しい死体があつたが、医療の対象は生きていたものだった。しかし・・・この現場は・・・。

川路 遺体だけを、診続ける・・・。

宇和田 ・・・・誰しもの想像を超えた現場でした。現場だったと思います。それを伝えるために・・・それなりの言葉が必要です。曖昧な言葉でやってもなにも意味がない、というのが、現場に立ち会った医師としての実感です。しかし・・・それを・・・ご遺族の前でというのが・・・。

川路 お気持ち、よく解りました。  
宇和田 すみません。お会いた早々にこんな話を……。  
川路 しかし……。その上ですわね……。

と、廊下で声がする。工藤智である。

工藤 すみませーん……。あれー……。

津村、外に身を乗り出して。

津村 あー。こつち。

工藤 あ……。久美子さーん。いましたよー。

岩沼 あ。奥さんいらしたの。

津村 清流荘の智くんが連れてきてくれたみたいです。

津村久美子が入ってくる。津村の妻。30代半ばである。

久美子 遅くなりまして申し訳ありません。

津村 (久美子に) だいじよぶなの。

久美子 ……ええ。

とそこに、工藤が、弁当を入れたパッドを持って入ってくる。まだ20歳そこそこくらい。澁刺としている。

津村 うわ。なに。

工藤 差し入れです。母ちゃんが持って行って。

岩沼 や……。なに。凄いな……。

津村 ごめんね。宿代につけておいて。

工藤 いえいえ。勝手に母ちゃんがやったことなんで。男のひとたちばかりで食べモンのことなんて忘れてるだらうって。

岩沼 いや……。確かに。

工藤 本番はいつでしたっけ。

川路 8月11日だね。

工藤 ああ。ちょうど前の日だんねえ。勉強会して、灯籠流して、次の日は山ですか。

岩沼 そうそう。そうしようと思ってるんだよ。

工藤 喜ぶよネエ。仏さんも。

岩沼 智くんは覚えてる。

工藤 そらあ、覚えてますよ。あんときは、村中にひとが溢れただんねえ。

川路 中学は、ここ？

工藤 そうですよ。ヘリコプターやら、その校庭に降りたんでしよう。テレビで見ただ、とても自分を通ってる中学とは思われなかったもん。

岩沼 そうか。そうだよねえ。

工藤 とりあえずお握りってことで炊き出しやりましたからねえ。うち、兼業とはいえ民宿でしょう。村中から米がなくなつて、母ちゃんも父ちゃんもお客さんに食わせらんもんがないちゅーて、慌てとりました。

川路 神代のひとたちには、ほんとうによくしてもらいました……。

工藤 それは村長さんが立派だったからだど、うちの親なんかは言つとりますねえ。

川路 今回も全面的に協力していただいている。ありがたく思っています。

工藤 うちは兄が役所勤めでしょう。群馬側に落ちたちゅうことがわかったときに、村長さんから強く言われたそうですよ。とにかく村としてはできる限りのことをする。金んことは言うな。人道的な立場を取れって。

川路 ……そうですか。

工藤 人道とか、子供だったから、正直よくわかんなかったですけどねえ。

岩沼 まあでも……なんかかっこいいよね。

工藤 ……まあ。はい。不謹慎なんですけど……わが村の村長ながらカッコいいなあって、思いましたねえ。ゼロ戦のパイロットだったちゅう話です。気骨があつてねえ。

場が少し明るいかんじになる。と、そこに入ってくる松尾繁行。30そこそこくらい。

松尾 あ、すみません。こちら、神代村セミナーの準備会ですか。

川路 そうですが。

松尾 ご連絡しておりました日の出新聞の松尾ですが……。

川路 ああ。はい……。

松尾 川路さんですか。

川路 はい。

工藤 (津村と岩沼に) じゃあ、俺、戻ります。

津村 ああ。ありがとう。

と、出ていこうとする工藤。入ってきた若い女性とぶつかりそうになる。

黒崎恵理である。20歳になったかならないかくらい。

工藤 すみません。

黒崎 いえ。こちらこそごめんなさい。

岩沼 あれ・・・恵理ちゃん？

黒崎 はい。

岩沼 来てくれたんだ。知らなかったよ。

川路 黒崎さんが亡くなられたので、代わりに参加したいと来てくれたんです。

黒崎 お役に立てるかかわかんないですけど・・・。

岩沼 いやいや。こんな若い女性がいるだけで活気づきますよねえ。

黒崎 よろしくお願いします。

岩沼 お父さん・・・残念でしたね。

黒崎 いいえ。お葬式にも来てくださってありがとうございます。

岩沼 いや。そんな。

黒崎 今回はなんとしても関わりたいなんですけど・・・。

川路 でも恵理ちゃんがかわりに・・・喜んでますよ。

黒崎 余計なことするなって怒られそうですけど。

川路 ああ。そうだ。ご紹介します。こちら、みなさんにもご連絡はしておりましたが・・・日の出新聞の松尾さん。11日の本番まで継続的に取材されたいそうです。

松尾 松尾です。それぞれ伺いすることもあるかと思いますが、よろしく願いいたします。・・・あ。そろそろ始まる感じですか。

川路 いえ。まだ何人かいらっしやる予定なのでそれを待つて・・・。

松尾 こちらで待たせてもらっていいですか。

川路 ああ・・・構いません。資料のほうは・・・。

津村 あ。もうこれで、だいたい。

川路 (宇和田に) 宇和田さん、会場をご覧くださいか。

宇和田 え・・・でも。

川路 今回の、この神代村セミナーに関しましては、医療関係の方のレクチャーは不可欠だと思っています。もちろん無理強いはできませんが・・・少し・・・はじまる前に話ませんか。

宇和田 ……了解いたしました。

川路・宇和田、出て行く。資料の最後の確認作業をする岩沼と津村。

松尾 そちら、資料ですか。

岩沼 あ。はい。

松尾 見せていただいてもいいでしょうか。

岩沼 ああ。はい。どうぞ。

資料を渡す。

岩沼 (自分もパラパラ資料を見ながら) それにしても、凄いよね。川路さんは。ほんとです。航空のためならどこまでも行っちゃいますからね。

津村 アメリカまで何回もいかれてねえ。本番には、航空安全の権威が2名もアメリカから神代まで来るっていうんだから。

黒崎 山にもいっしょに登られるんですね。

岩沼 ああ。うん。

黒崎 事故の起こったこの場所で、航空安全のための勉強会と、慰霊のための登山がセツトになったセミナーをやるなんて凄いですよね。

岩沼 世界初だろうって。思いつかないよね。フツウ。

黒崎 しかも遺族が中心になって・・・っていうのは世界でも類のないことなんだって父から聞きました。

津村 それに、そういう人をゲストで呼べるってことは、それだけご自身も航空について勉強されてるってことでしょう。

岩沼 しかも英語だよ。通訳つけてないんだって。聞いたら。

津村 そりゃそうですよ。自腹で往復したうえに通訳までつけたら、いくら一流企業に勤めてるって言うてももちませんよ。

岩沼 俺なんか、かなり川路さんに話を聞かせてもらってるけど、どこまで理解できてるか心許なくってさあ。

津村 それは、ぼくも同じですよ。

岩沼 いいのかなあ。俺なんか共同発起人なんて言っ

津村 岩沼さんは、その分、ほら、川路さんができないことをやってらっしゃるじゃないですか。

岩沼 え。なに。ホッチキス？

津村 違いますよ。ねえ。恵理ちゃん。わかるよねえ。

黒崎 (笑って) ええ。なんとなくですけど。

岩沼 え・・・え・・・肝心の俺がぜんぜんわかってないんだけど。

津村 だから、岩沼さんがいるから、安心してぼくらもここに来られるんです。そういうことですよ。

黒崎 父もいつも言っていましたよ。岩沼さんがいてくれてほんとに助かってるって。なになに。おだててもなんにも出ないよ。

黒崎 よろしく願います。受付くらいしかできないですけど。

岩沼 いやいや。頼りにしますよ。

黒崎 ……あの・・・さっきの方は。

岩沼 え。さっきの方って？

津村 ああ。お医者さんだよ。検死をやられてた・・・セミナーの講師にお呼びしたいらしい。

岩沼 引き受けるかどうか悩まれてたから、川路さんが説得されるんじゃないかな。え。どうして。

黒崎 遺族の前で話をするのが忍びないってさ・・・。

岩沼 そうなんですか。

津村 聞きたいですか・・・って聞かれちゃってさ。まあ、そう言われるとなんか両方っていうか。ちゃんと聞けるかどうか、自信もないんだけど・・・。

岩沼 あの場には、ぼくらもいたんですけどねえ・・・。

黒崎 あのとときは・・・まあ・・・、こつちも尋常な神経じゃないっていうかね。・・・わたし、あの時は来ていないので、わかってないんです・・・。

岩沼 あ。そうなんだ。

黒崎 まだ高校生だったので、来るなど言われて。あの。どんなかんじだったんでしょか。

岩沼 こう、包帯でね・・・丁寧に・・・人型みたいにして・・・包帯取って見せろっていうこつちと、とても見せられませんでしたという警察のひとと・・・押し問答でさ。

黒崎 来るべきだったと・・・あとで何度も。だからわたし、しっかりと聞きたいです。

久美子 (夫に) なんで彼女がメンバーに入っているの。

津村 おい。

久美子 おかしいわ。だって彼女のお姉さま、日亜のスチュワーデスさんでしょう。

津村 やめないか。

久美子 同じ遺族って、勝手に出てこられても・・・。

黒崎 おい。久美子。

岩沼 それは・・・あの・・・そうですね。

黒崎 いや、恵理ちゃん。まあ・・・ちよつと出ようか。

久美子 いかも、きれいなご遺体だったって・・・。最初に報道発表になって・・・。すぐに引き渡されて・・・。そのご遺体しか見てないんでしよう。それじゃあ、あの夏、あそこでなにが起こったかなんて、わからないわ。違う？

黒崎 はい。そうですね。だから・・・来るべきだったって・・・。わたし・・・恥ずかしくて・・・。

津村 ぼくら一般の遺族と違って、おおぜいで押しかけるなんて出来なかったんだよ。そうだろう。

久美子 あたりまえだわ。

津村 どうしてほしいんだ。矛盾してないか。

久美子 だから今さら出てくるのが解らないってわたしは言ってるの。

津村 黒崎さんは、日亜と遺族、どちらの立場でもある人間が入っていたほうが、今後のためにも役だてることあるだろうって、名乗りでてくださって・・・それで、体を壊すくらい尽力されて・・・。

黒崎 ……そんな・・・いいです。

津村 いや。でもね。

黒崎 あの・・・、お気持ちよくわかります。

久美子 いいのよ。気持ちなんてわかってもらわなくても。

黒崎 もちろん久美子さんのお気持ちぜんぶなんてわからないです。でも・・・あのわたしがいると、どんな気持ちになるかくらいは、わかります。

久美子 じゃあなんで来たのよ。

黒崎 それはその・・・来たかったからです。

久美子 それがおかしいって言ってるの。

黒崎 すみません。

岩沼 いや。謝ったらおかしいでしよう。恵理ちゃん。

黒崎 でも・・・あの。これからみなさんがおやりになりたいことって、アメリカから偉い学者の方がくればできることなんではないか。

久美子 なによ。

黒崎 日亜が動いてくれないと、できないんですよ。

久美子 脅す気なの。

黒崎 いえ。そんな。

津村 久美子、ちよっと出よう。

久美子 いやよ。

黒崎 こんないい方しちゃってすみません。でも・・・わたし・・・日亜に動いてほしいんです。

久美子 なに・・・偉そうに。

黒崎 ほんとうの事故原因は別にあるんじゃないかって言ってるんですよ。わたしたちの納得がいくまで、まずは日亜にちゃんと調べてほしいです。

久美子、出て行く。津村、追いかける。

岩沼 (新聞記者である松尾にやや気まずいところを見られ) まあ、いろいろあるんですよ。それぞれ立場が。難しいですよね。

松尾 いや・・・その。

岩沼 はい。

松尾 ぼくにはお構いなく。

岩沼 え・・・。  
松尾 貴重な場所に立ち会わせていただいて感謝しています。ぼくがいることで、言いた  
いことが言えなくなるんでは、本末転倒ですから。  
黒崎 あの・・・。  
松尾 はい。  
黒崎 凄いカメラを持ってらっしゃるんですね。  
松尾 え・・・解るんだ。  
黒崎 わたし、写真部に所属してるんです。  
岩沼 へえっ。そんないいものなの。  
黒崎 ええ。みんなの憧れのカメラです。新聞記者の方って、こんないいカメラを持つも  
のなんですね。  
松尾 いやあ。それはいいですね。  
黒崎 え。そうなんですか。  
松尾 こんなカメラ持ってたらカメラ御大切に台風の取材やら行けないだろうって、怒  
られますよ。  
岩沼 趣味なんですか。写真が。  
松尾 いえ。ピントやら露出やら邪魔くさいから「写ルンです」でも済ませたいほうで  
すね。  
黒崎 え・・・じゃア。

と、そこに拝島が入ってくる。20代後半。後に日亜のメカニック担当と  
知れるが山男風で日焼けしておりまったくそうは見えない

拝島 すみません。遅くなっちゃって。  
岩沼 あああ。拝島くん。久しぶり。  
拝島 今日は呼んでいただいて。進んできますか。  
岩沼 いやあ。まだ会場の下見もこれから。  
黒崎 拝島さん。お久しぶりです。  
拝島 え・・・ああ。黒崎さんとの・・・。  
黒崎 はい。山小屋ではお世話になりました。  
拝島 なんか、印象変わったねえ。  
黒崎 え。そうですか。  
岩沼 え・・・え・・・どこらへんが。  
拝島 いや。あのトン汁をね。  
岩沼 え。トン汁。  
黒崎 寒い日だったから、トン汁を作ってくれてたんですね。



黒崎 なんか、真赤な顔して、じーっと一点を見て食ってんですよ。話しかけられなくて  
さア。  
黒崎 でもおいしかったですよ。  
黒崎 え。そうなの。  
黒崎 はい。すごく。美味しかったです。  
黒崎 ・・・それは良かった。  
岩沼 そういふ黒島くんも印象変わったよねえ。  
黒崎 え。そうですか。  
岩沼 なんかもう根っからの山男だもん。焼けすぎだよ。いくらなんでも。  
黒崎 でも夏はいいほうですよ。  
岩沼 え。そうなの。  
黒崎 雪焼け、きついっすよ。  
岩沼 でもスゴイですよ。どんどん登りやすくしてくれてますもんね。  
黒崎 黒島くんたちがマメにやってくれてるから。  
岩沼 登りやすいばかりがいいとも思わないですけど。  
岩沼 でも登りたいひとにはお年寄りも多いじゃない。  
黒崎 まあ本格的な登山ですからねえ。頭が下がりますよ。  
岩沼 ほんとだよ。登るたびに我が愛妻に心の中で文句言っちゃうね。なにもこんなところ  
で、なにもこんなところで。俺は大変だぞーって。  
黒崎 いや・・あの。すみません。  
岩沼 ああ。ごめん。そういうつもりじゃ。(黒島がやや松尾を気にしたのを見て)ああ。  
黒崎 新聞社の方。取材されるって。  
松尾 日の出新聞社の松尾です。よろしくお願いします。  
黒崎 あ。えーと・・日亜航空の黒島です。  
松尾 あ。日亜航空の方なんですか。  
岩沼 日亜航空のひとたちが、支援班って言って、神代の山道整備とかしてくれてるん  
ですよ。  
松尾 ああ。もちろん存じてます。一度取材もお願いしたのですが、目立つようなことは  
したくないからおっしゃって。  
黒崎 まあ、俺ら忍者みたいなもんですから。  
岩沼 え。なに。忍者。かっこいいね。でもまあそんなかんじか。  
黒崎 ササッと。  
岩沼 ぼくらみんな支援班の人たちには感謝してます。だから、おもしろおかしく書か  
ないでくださいね。  
松尾 おもしろおかしく書く技量もないので大丈夫です。  
黒崎 今日は、黒島さんだけですか。

拝島 いや。俺だけ川路さんから呼び出しです。  
岩沼 え。そうなの。

拝島 日亜では整備やってるって、うっかり言っちゃったんです。  
岩沼 え。整備なんだ。知らなかったよ。

拝島 日亜でのキャリアなんか、山では役立ちませんもん。なのに聞かれてつい。そして  
ら「専門家の立場からぜひご意見を伺いたい。」って。

岩沼 あの目で、こう正面から見られたらね。

拝島 まばたきしないですもん。そういうときあの人。

黒崎 やだ。ふたりとも。ひどい。

拝島 でも呼んでいただいたのもありがたいし。腹くくって参加するかな、と。

岩沼 夜は清流荘に来るんですよ。

拝島 え。いいんですか。

岩沼 いいもなにも、たまには飲もうよ。とことんさ。

と、そこに酒見と桑原が入ってくる。キチツとスーツを着込んでいる。  
酒見は50代。桑原は30台後半である。

酒見 神代村セミナーの準備会はこちらですか。

岩沼 あ・・・はい。

酒見 日亜航空の酒見と申します。

日亜という言葉に緊張が走る。

岩沼 え。あの。

酒見 川路さんからお手紙をいただきました・・・。

岩沼 え。そうなんですか。

酒見 これはわたしの部下で、桑原と言います。急なことで、車を頼みました。

桑原 桑原です。よろしくお願いします。

黒崎 あ・・・わたし、川路さん、呼んできますね。

岩沼 悪いね。いいかな。

黒崎 はい。もちろん。

黒崎、川路を探すため、退場。

拝島 (すっと前に出て) 酒見さん。おひさしぶりです。

酒見 ああ。拝島くん？

拝島 ご無沙汰しています。

酒見 どうしてここに。

拝島 ああ。なんか、最近、ずっとこっちで……。

酒見 ああ……支援班のことは聞いてますよ。拝島くんもその一員だったんですね。

拝島 ええ。まあ……はい。

酒見 あれ。拝島くんは、桑原くんのこととは知ってましたかね？

拝島 や……いえ……あれ、会ったことありましたっけ。

桑原 いえ……。

酒見 まあ大きい……大きすぎる組織ですからね……。

岩沼 ええと。あの。どうしてこちらに。

酒見 申し訳ありません。勝手に押しかけたような形になってしまっただけ。

岩沼 いや……それは……まあ……いいんですが……いや。よくないのか。

酒見 お邪魔でしたら遠慮しますが……。

岩沼 ……あ……そういうことでもなく……ただちょっと、いらっしやるとは考えていなかったの……いやあ。川路さんも言っておいてくれればいいのに。

酒見 いや……わたしのほうが……ちゃんとお伝えしていなかったの……。

岩沼 はあ……。

酒見 そうだ。名刺をお渡ししてなかったですね。

岩沼 いえ。いいですよ。そんな。

酒見 (名刺を出して)遅れまして申し訳ありません。改めまして、日亜航空の酒見と申します。

桑原 (続けて出し)日亜航空の桑原です。

岩沼 すみません。ぼく名刺やらもってなくて……。えーと……健康管理部……

酒見 はい。名前の通り、社員の健康管理の仕事をしております。

岩沼 あれ。桑原さんは、違う部署なんですね。

桑原 いえ……あの、部下と言っても、酒見さんが転属される前の話なので、いまは別々の仕事をしています。

岩沼 ああ。そうなんですか。

と、そこに、川路、宇和田、黒崎、松尾、戻ってくる。

川路 酒見さんがいらしていると聞いて……。

酒見 今日はとつぜんお邪魔してしまっただけ。

川路 いえ……あ……どうぞ。座りませんか。

酒見 あ……ありがとうございます。(目で桑原を促し自分も座る。)

川路 ああ……拝島くん、来てくれてたんだ。

拝島 はい。

川路 ちよっと待っててもらえますか。

拝島 もちろん。

酒見 皆さんはわたしのことは……。

川路 お返事がなかったということで、皆には話していません。

酒見 お恥ずかしい話、今朝ほどまで来るべきか迷っております……。

川路 ……そうですか。

酒見 もう連絡も取れませんでしたので急遽……。

川路 (岩沼に) 酒見さんは、日亜航空で健康管理の仕事をしておられて。

岩沼 ああ聞きました。それがなにか今回のことに関係してるんですか。

酒見 ご存知だと思うんですが、羽田沖の……精神的な健康を害した機長による事故……。

岩沼 ああ……はい……あの……。

酒見 はい。あの事故のあとに、職員の健康に關しましての新設部署に移りまして。ですから神代の事故には直接関わっていないのです。しかしそれまでは、16年ほど、主に事故処理の仕事に従事しておりました。

岩沼 事故処理……ああ。なるほど。それで。

川路 航空安全について、専門誌に寄稿されているのを拝見しまして、連絡を取り、何度か面談を重ねました。いろいろあつてしばらく連絡を控えていましたが、今回のセミナーに際し、やはりご協力いただきたいと思いい切ってお手紙を差し上げたのです。

岩沼 え。いろいろって

と、津村と久美子が戻ってくる。

津村 どうも、お騒がせして……。

川路 あ。津村さん。こちら日亜航空の酒見さんと……。

桑原 あ……桑原です。

久美子 え……日亜の方がどうしてここにいらっしゃるの。

岩沼 川路さんが、連絡をしてくださったんです。

久美子 聞いてないわ。

津村 話を聞こう。それから……。

久美子 (酒見に) 帰ってください。

津村 ちよっと……。やめないか。

久美子 うちの息子は……浩太は……ひとりで死んだんです。日亜のせいだ……。たった9歳です……。東京のおばあちゃんのうちに遊びに行つて……いとこたちとディズニールランドで遊んで……帰りはどうしても飛行機で帰りたいというから……。

切符を取りました。ゴールデンウィークのときにも乗りましたから大丈夫だと電話口で得意そうに言って・・・入口のところで待ってるからね、スチュワードさんに連れてきてもらうのよ・・・と言いついて切りました。それきりです。それきり帰ってこなかったんです・・・。

酒見 津村久美子さんでらっしゃいますね。

久美子 ……（名前を知っていることにやや気押しされつつ）それがどうかしました。

酒見 お気持ちは・・・。

久美子 わかるなんて言わないでください。

酒見 あんまり・・・。

酒見 ……はい。

酒見 今日のところは帰るべきなんじゃないでしょうかね。

酒見 ……。

酒見 今朝まで迷われてたつてことは、解ってるわけですよ。

酒見 ……。

酒見 ここに来る資格はないかもしれないと、そう思ってたんですよ。

酒見 ……まあ・・・そうだね。

酒見 名古屋空港での事故のあとですね・・・最後まで処理がしきれずに転勤になったのは酒見さんのせいではないとは思ってますよ。そうやって・・・世話役の首を平気で挿げ替えますからね。保障の話するのに、情がうつたらいかんつて・・・。

酒見 仕方ないとは・・・思っていないよ。

酒見 ぼくは・・・それでも・・・最後までやってくれろと思つてましたよ。30日ごとに、転勤しない理由書を提出して、承認を受けて・・・そんな風にしてても、最後まで・・・酒見さんだったらやってくれろと思つてましたよ。それがあんな・・・お化けみたいに疲れ果てた顔で・・・簡単に転勤つて・・・。

酒見 君をはじめとする何人かが、山の整備に尽力していることは・・・素晴らしいことだと思つている。

酒見 俺の話はいま関係ないでしょう。

酒見 しかし・・・社としては・・・君たちの活動を認めてはいない。そうでしょう。

酒見 え。そうなんですか。

酒見 彼らが山の整備をしたり、ここでご遺族の方のお世話をしたりしているのは、自主行動によるものなんです。

酒見 いいでしょう。今、その話は・・・。

酒見 通告は出ているのですが、会社としては、クビにもできず、見て見ぬふりといひますか・・・。

酒見 しかしですね・・・彼らが、道を整備したり、雪で倒れた墓標を修理したりすること、ずいぶん私たちも・・・。

酒見 もちろん、わたしは、本来は社が行うべき、心の問題を・・・埋めていく行為を彼

揮島 らがしているのだということは承知し、必要なことだとは思っています。しかし・・・  
なんですか。

酒見 君はまだ若いだろう。その見識を・・・ここで得たものを・・・もっと具体的なか  
たちで・・・生かすべきときが来ているんじゃないか。

揮島 その言葉、酒見さんにそっくりお返ししていいですかね。

酒見 ……。

桑原 あの・・・っ。

揮島 ……なに・・・。

桑原 ご遺族の前で・・・すべき話ではないのではないのでしょうか。

津村 いや。あの・・・大丈夫です。

久美子 あなた。

津村 まず話を聞こう。

久美子 だって。

津村 ちゃんと聞いてから判断したって遅くないだろう。

久美子、とても承服しきれないというように座る。

岩沼 あの、事情って聞いても構わないもんですか。

川路 面談のなかで知った酒見さんのお考えは、わたしたちがこれからやろうとしてい  
ることと、かなりの部分が重なっていました。率直に話していただきましたし、こ  
ちらの話にも共感していただけたと感じています。

酒見 事故処理を16年に渡って続けていく中で、改善という検地に立ちましたときに  
杜撰であると感じてきました。「事故を処理する」という視点は・・・あまりに未  
来がないといえますか・・・。

岩沼 え、じゃあご協力いただけるということなんですか。

酒見 いえ・・・その・・・。

川路 個人の考えと、組織の思惑はまた違う。いまの立場では協力できることにも限界が  
あると、はっきり言われたわけです。

岩沼 はあ・・・だいたいわかりましたよ。川路さん、そう言われて、もういいとばか  
りに連絡をしなくなったんでしょう。

川路 まあ・・・そう言われればその通りなんですが。

岩沼 短気だなあ。川路さんは。

でもまた連絡をとられたわけですよ。

川路 昨年、日亜航空と事故調査委員会に、要望書を提出しましたよね。事故と死因の関  
連について再調査してほしいという。

岩沼 酷い話でしたよねえ。ケンもホロロでしたから。

川路 事故調査委員会は、出した報告書以上の調査をする必要はない、と回答してきました。日亜に至っては、当局の指示に従って改善していきます、と。

岩沼 で、当局というのは運輸省でしょ。運輸省で組織しているのが事故調でしょ。事故調はもうなにもしません、でしょ。事故調から指示がないなら、日亜もなにもないって……ぐるぐるのタライ回し。

川路 わたしが酒見さんに今回の件で、手紙を書きましたのは、ここで改めて日亜の悪口を聞かせるためではありません。その一件で、わたしはこう考えました。日亜内部に酒見さんのような考え方がいるということをやまず大切に、協力を仰がなければと進むものも進まないのではないかな。

酒見 ……。

川路 どうぞ……座ってください……。ぼくは酒見さんが来てくれるとは、正直考えていませんでした。しかし……日亜航空、クラフト社、そして運輸省事故調査委員会その3つが動いてくれなくてはならないのは事実です。そのためには日亜内部の協力者は不可欠です。……まずは……話を聞いていただきたい。

それぞれ、逡巡が見受けられるが、座る。

川路 では木下さんや、阿久津さんがいらしたら始めましょう。

久美子 いらっしやらないですよ。

川路 ……それはどうですか。

久美子 どうしてって……とにかくそのようにお決めになったんです。かぐら連絡会関西支部は、今回のセミナーからは撤退されるそうです。

川路 津村さん……事情はお聞きですか。

津村 いえ。聞いていません。久美子、なんで教えてくれなかったんだ。

久美子 わたしから言えば済むことでしょう。

川路 いまさらですか。本番はあと一カ月後に迫っているんですよ。ここまで準備してきて……まさか諦めるというんですか。

津村 すみません。うまく取りまとめられなくて

川路 いや。津村さんのせいでは。(酒見たちに)前にいちど、講師の方をお呼びして内部的な勉強会をしようとしたのですが、主催団体の「かぐら連絡会」から中止するという通告がありまして……頼んでおりました講師をお断りしたことがあるんです。(岩沼) 岩沼さんのほうには話は……。

岩沼 あるわけないですよ。ぼくは、川路派だと思われていますから。

川路 派閥とかそういう考え方自体が狭すぎる。そうでしょう。

久美子 そうかしら。

川路 なんですか。

久美子 この間、川路さん、遺族連絡会でおっしゃったじゃないですか。遺族会というのは、グルメを楽しむ会に名前を変えられたらどうか……って。

川路 そんなことは言っていないわ。

久美子 いいえ。そんなようなことを確かにおっしゃいましたわ。

川路 どうしても女性は、愚痴をぶつけ合うことばかりが目的になる。せつかくの会なのだから、集っておいしいものを食べおしゃべりするよりほかにやるべきことがあるのではないか、そう提言しただけです。

久美子 そうやって……いつも上からなのね……。

津村 川路さんはそんなつもりで言ってるワケでは……。

久美子 解ってないのよ。社会的な地位が、こういう遺族の会みたいなものでも通用すると思ってるの。そうでしょう。

津村 久美子！

久美子 だって……。

津村 川路さん……。ぼくは、基本としては川路さんのおやりになろうとしていることは意義のあることだと思っています。でも……なんとか内部をうまく取りまとめていかないと……うまくいくものもうまくいかないのではないのでしょうか。

川路 関西が抜けても、なんとかやる方法を考えましょう。

津村 木下さんも阿久津さんも、ほんとに抜けたいわけではないと思うんですよ。心を開いて話をすれば……。

川路 心を開いた結果、抜かれたのです。どうにもならないでしょう。

津村 いや……。しかしですね。

岩沼 ぼくが話しますよ。ね。なんなら関西まで行きますし。

川路 事故から5年たちます。傷のなめ合いだけで、組織を成り立たせるのは不可能だ。みな、気づいているはずですよ。

久美子 わたしたちが……。あのとき……。あの会があったことで、どんなに慰められたか……。どうして解ってくださいさらないの。なんでも合理的に。合理的に。日亜と変わらなわ。

川路 そのときのことを否定しているのではありません。これからの話をしているので。

久美子 ついていけないわ。

川路 もし抜けられるなら残念ですが仕方ありません。

岩沼 それを言ったら川路さん。

川路 それでは、もういらっしやる方はこれだけということ……始めましょうか。

岩沼 川路さん……。もう少し話しませんか。

川路 ようやく……。ようやく実現するのです。例えひとりになってもここでひくわけ



にはいかない。そうでしょう。

岩沼 ぼくももちろん引くつもりはないですよ。でも、ここまで来てくれたひとに帰れっ  
ていうのは、また違う話じゃないですか。

久美子 (憤然として) 大丈夫です。お話、すべて聞いてから考えますから。そんな都合よ  
く帰ったりしませんわ。

川路 では、資料を配っていただいてもいいですか。

岩沼、久美子を気にしながらも資料を配布する。

川路 神代村セミナーは、航空安全の見地から、神楽岳日亜機墜落事故をいまいちど検証  
していこうという会です。アメリカからふたり航空安全の権威をお招きし、日本側  
からも何名かの講師にたっただきまして、講演のほか、パネルディスカッショ  
ンなども行う予定です。

宇和田 日本側からはどなたが講師で出られますの。

川路 医療関係者から宇和田さん。航空機関係では、東都工業大学の伊佐山教授、そして  
いまひとり、神代村の佐鳥村長にお話しただける予定です。(皆に) 宇和田さん  
は、現在は藤岡で勤務されていますが、大学院で法医学の勉強をされていたという  
キャリアを買われ、藤岡では最後まで検死チームの一員として働かれました。藤岡  
での127日間に立ち会った医師としてお話を聞かせていただければと思ってい  
ます。そして・・・いまひとり酒見さんには、航空機事故の背景を知るエキスパー  
トとしてせめてパネルディスカッションに立っていただきたい。

岩沼 え・・・講師でお願いするってことですか。

酒見 いえ・・・それは、聞いていません。

岩沼 やっていただけるものなんですか。

酒見 いまここで、お引受けします、と明言することは・・・。

川路 ぜひ検討していただきたい。

岩沼 え。ご意見を聞くのはともかく、講師っていうのはどうなんでしょう。

川路 なぜですか。

岩沼 え。だって、来てくれるひとの気持ちもあるじゃないですか。

川路 今回を逃すと、次、確実にできるとは限らない。やれるだけのことはやるべきでし  
ょう。

岩沼 ……。

川路 さて・・・具体的な話をはじめの前に、まず、なぜぼくがこのセミナーを開こうと  
考えたかについて、お話しします。(ポケットからひしゃげた10円玉を取り出  
す) ご覧いただけますか。これは・・・娘のハンドバックからでてきた10円玉で  
す。遺品として、戻ってきたのですが・・・宇和田さん・・・女性の場合、ハン

ドバックを持っていたらどこに置きますか？

宇和田 大きなものなら荷物入れに入れますけど……。

川路 このくらいのこと……持ち手のついた。

宇和田 それなら……たぶん肘かけと自分の間に置くかと思えます。

川路 娘は……下半身がすべて押しつぶされた状態で戻ってきました。わたしは包帯を取って見せてくれと頼みましたが、見ないほうがいいと言われてそれに従いました。しかしこの一〇円玉を見て……こんな硬いものがどうやってひしゃげたものかと考えたとき……娘を押しつぶしたものは、この一〇円玉を押しつぶしたものと同じだ、と気づいたのです。恵理ちゃん。神楽での事故の原因は知ってるよね。隔壁の修理ミスによる金属疲労ですよ。クラフト社が行って……たしか……うまく止まらなかったって。

川路 そうだね。隔壁の上下を組合せて、それをリベットで止めるという工程であるはずだった。しかし、実際に合わせてみると、サイズの合わない部分があってね、そこにプレートをあらたに作って嵌めこんだんだ。つまり、3枚の板を……こう……合わせて、リベットで留めつけた。

岩沼 ところが、そのリベットがうまく貫通していないところがあった……。

川路 しかも、事故原因がほんとうに隔壁の破壊であったかは曖昧です。隔壁すべては回収できていないわけだし。

岩沼 そもそもサイズがあってないから継ぎ足したっていうのも、ぼくは分からないですけどね。

川路 全てを作り直したらコストが掛かりすぎたのでしょうかね。

岩沼 だからそうなる前にちゃんと測りなさいと言いたいですよ。

拝島 俺ら整備の人間は、あの事故のとき、もっと原因をしっかりと調べてほしかったですよ。原因が出てから、動きたかった。なのに会社はとにかく整備しろ、整備の方法を見直せの一点張りで……。それは……整備ミスが原因であれば、やり直すよ。寝ないでやりますよ。寝ていられますか。でももし今までの方法で問題ないのに、やみくもに新しい方法でやって取り返しつかないことになったらどうしますか。今回のこれは日亜には防げないミスでしたか。

拝島 ……えーと……。

川路 率直な意見を。

拝島 というか、なんで修理ミスが原因だとなったときに、あそこまで日亜が叩かれたかが、ぼくは正直わからないんです。

黒崎 え。どういうことですか。

拝島 バスだってタクシーだって故障したら修理工場に持ち込むだけでしょう。納車されるまでずっと見張ってたりもしないはずですよ。なのに航空機の故障だけが、社内ですべて直せる、直すべきだと思われている。

川路 では、修理ミスが発見できなかったのは仕方がないと。

拝島 仕方がないなんて思えません。思っていたらここには来ません。でも、そんな技術があったら、うちは航空機の製造業になってます。他所からあんな高いお金出して買わないです。

岩沼 いや、でもさ。そういう言い方しちやたらまずいんじゃないの。

拝島 ここに来いと川路さんから言われて、ぼくも考えたんです。日亜航空は製造業ではないわけですから、どうがんばってもできないことがある。そこは、日亜のメカニックにいたものとしてちゃんと伝えなきゃいけないんじゃないか。なんでもかんでも日亜が悪いでは、進むものも進まないんじゃないかと。

川路 ぼくもそう思いますよ。お互い率直に行きましょう。

拝島 そのつもりで来ています。よろしくお願いします。

川路 しかし、故障の原因以上に、神代村セミナーが考えていきたいのは生存者のことです。……ここで極めて個人的な話を差しはさむことをお許しください。わたしは、この事故で、ひとり娘を喪いました。どこの家でもそうでしょうが……子供というのは家族の中心です。津村さんのご息がそうしたように、わたしの娘もその夕方、空港から電話を掛けてきました。お盆でなければわたしが受けることもなかった電話ですが、たまたまわたしが受けました。「今日の夜には帰ります。」と明るい声で告げた娘はしかし、それきり帰っては来ませんでした。……ただ……ひとつ忘れられないことは……わたしは、山中に飛行機が墮ちたと聞きましたときに……極めて普通に……死を覚悟いたしました。悲しみはもちろんあり……からだに異常を来すほどでしたが、頭のどこかでこの暑い時期の葬儀の段取りについて……考えていた。しかし、羽田から現場に向かうバスが立ち寄ったインターチェンジで、4人の生存者があったということ……はじめて聞いたのです。その時の衝撃を……わたしは生涯忘れないと思います。生存は……不可能ではなかった……。つまりは……それが事実でした。宇和田さん……。

川路 医療関係の方にどうしてもセミナーに立っていただきたいのは、ひとりひとりの……凄惨を極めた亡くなり方に……生きる可能性が……刻まれているとわたしは考えているからです。

宇和田 それは……お手紙、拝読し、理解しているつもりです。

川路 医師会の関係やプレッシャーなどもあるかとは思いますが……。

宇和田 大きな問題ではない、と言うつもりはありませんわ。

川路 わたしは、研究職です。……生存者がいたということは、詳しく調査研究することによって、その生存率の向上に繋がるのではないか……と考えました。今回の事故は……修理に万全さえ期せば次回以降はもうこういった事故は起こらないだろうという楽観的な見方のなかに埋没していつているようにわたしは感じます。

しかし、ほんとうにそうなのでしょいか。

宇和田 あの仕事は、自分の仕事の原点から見つめ直す・・・見つめ直さざるえない・・・そういった仕事であったと思っております。520名であるはずのご遺体の総数は、数千という数に及びました。それだけの数に分断され、刻まれてしまったということですから。ありとあらゆる方法で確認され、519名までがご遺族に引き渡されました。それでも450体ほどの部分遺体が、最後まで残され、そのまま荼毘にふされました。わたしたち医師は死体検案書というものを書く必要があります。あの事故のときには・・・その死因のところに書きいれるべき言葉が見つからない、ということがありました。いままであったどの死因にもあたらないういうご遺体が数多くあったのです。全身挫滅・・・左下肢以外挫滅・・・このような言葉を、打合せの上、その場で作り上げ、書きこんでいきました・・・。病院に復帰いたしまして・・・生きてらっしゃる患者さんに接したときの・・・そのかけがえのなさ・・・。しかし、その前にやるべきことが、あるのではないかと・・・わたしがあの日以来考え続けたのは、わたしたちが痛ましき前の前で忘れていたもの・・・解っていたにも関わらず・・・見ようとしなかったこと・・・そういったことだったので・・・。

宇和田、それ以上の言葉を言うべきかどうか、という間。

川路 遺体は資料である・・・ということですね。

宇和田 ……そのような言葉を使うことが・・・妥当であるかはわかりませんが。

川路 ひとつひとつの遺体には、ヒューマンな物語が刻まれていました。今回はセミナーの特質上、もちろんそういったお話もお聞きしたい。ひとりひとりが生きていた人間だということを・・・。

宇和田 ……しかし、ヒューマンを廃したデータこそ、ほんとうに知りたいこと・・・。

川路 はい。そうですね。

宇和田 ……わたしが、今回の事故を通じまして、ずっと考えていたことは、つまりは今、川路さんが言われたようなことです。ご遺体・・・遺書・・・そして、ご遺族の記憶・・・。そこには物語があり、命があり、感動があります。

久美子 感動ですって・・・。

宇和田 はい。

久美子 そんな人ごとみたいに・・・意味が解らないわ・・・。

宇和田 では、この時期に・・・なんども繰り返される・・・週刊誌の記事のことを・・・どうお考えですか。

久美子 そんなもの読まないもの。

宇和田 松尾さんはなぜ、こちらに取材にいらしたんですか。

松尾 えーと・・・。

宇和田 ここに・・・そういう・・・「売るに足る物語」がある、と思われたからいらしたんではないのですか。

松尾 ぼくのはいいので、先に進めてくれませんかね。

宇和田 どういうことですか。

松尾 いないものとして、扱っていただければ。

久美子 勝手にずかずか入りこんできて、いないものって・・・都合がいいのね。

松尾 今日が大切なセミナーの準備会であることは理解しています。資料は・・・もちろん事前に読ませていただきました。しかし、ぼくは、なにがここで行われるかは知りません。皆さんと同じです・・・何を書くかは、今日、帰ってから考えます。

久美子 ずいぶん偉そうなのね。

松尾 そういうつもりはないのですが・・・あの・・・必要であれば、席を外しますが。

川路 いえ。その必要は。

松尾、またメモに目を落とす。

宇和田 夏の盛りでした。ご遺族は・・・深く傷つかれ・・・一刻も早くご遺体を・・・お返ししなければと・・・それだけが最優先として進められました。また現実問題としても腐敗や、次々に運ばれてくるその量など、ひとつひとつ精査してはとうにもならない状況でした。今回のような事故の場合、何体かの解剖が義務付けられています・・・当時の身元確認の長であられた警察官が・・・それをお願いすることになりました。遠慮があり、ご遺族のお気持ちももちろんあり、それは困難を極めました。結局、解剖に回った5体のうち・・・4体までが、日亜の職員の方でした。黒崎さんのお姉さまも・・・ご協力いただいたように記憶しております。

黒崎・・・はい。そうですね・・・。

岩沼 え。そうだったの。

黒崎 父は、あまりそのことは他のご遺族には言うなと・・・。

宇和田 しかし、その規則の範囲で済ませてよかったのか、ということも考え続けていたことでした。特に、損傷の少なかつたご遺体について、生存の可能性も高かつたという点もあり、もうすこし精密な分析をするべきであったと。

川路 そうですね。特に、死因と航空機の構造がどう関係しており、どうすれば改善するのが知りたい。たとえば、あるひとりの男性は、ほとんど損傷のない状態で椅子に腰かけたまま亡くなっていました。しかし・・・安全ベルトを外しますと・・・そのベルトのバックルがちょうどナイフのような役割をして・・・体を分断していたということが解りました。安全を守るべきベルトによって亡くなったわけですがたとえばバックルの位置を変えれば・・・ベルトの幅は・・・そしてなにより形状は・・・久美子さんは、客室乗務員の方の安全ベルトの形状をご存知でしょうか。

久美子 え・・・いっしょでしよう。違うの。

拝島 ・・・・肩掛け式ですね。

川路 それはなぜですか。

拝島 安全性に、すぐれているから、ではないでしょうか。

川路 では、なぜ全部の客席にそれを採用しないのですか。

拝島 重量ですね。客席全部をそうすると重量的に相当な増加があるはずですよ。

川路 それだけが理由ですか。

酒見 ・・・・それと・・・おそらくはコストが・・・。

川路 わたしは、この重量と、コストの計算を、日亜にお願いいたしました。島崎取締役がいらしたときに書面でお渡ししたのです。彼は必ずやります、と請け負ってくれましたが・・・現在まで、その返答はただただおられません。

酒見 おそらくは計算するまでもなく実現不可能だと判断したのでしよう。今ある航空機をすべてそうするとしたら、いったいどれくらいのコストが掛かるか想像もつきません。

川路 わたしは・・・全てをいまずぐ肩掛け式にしてください、と依頼したわけではありません。ただ、コストと重量、そしてそのことによつて為し得る安全性の強化がどのくらいのものかを調べてください、とお願いしただけです。

酒見 しかし、もしも調べた結果、安全性が著しく向上するとならば、コストがどうあるうと、遺族会として請求していく、ということにはなりませんか。

川路 わたしは企業で研究をしてきました。なにをやるにしても、コストを無視できないのは重々承知しています。

酒見 そのような考え方をされない方もいます。

川路 そういった心配は、年間に乗られる方の運賃に計算してひとりあたりどれくらいになるか、という計算までしてから考えても遅くないですよ。

酒見 まあ、それはそうなんですが・・・。

川路 わたしは・・・超合金のカプセルで乗客を覆えと言っているわけではありません。生存の確率をあげるために、実現可能なことはなにか・・・共に考えてほしい。わたしもできる限りのことをする・・・させてくれと、頼んでいるだけです。

酒見 わたしもちろんそう思っています。しかし・・・。

川路 島崎取締役も高浜社長も、その場では、「これは日亜が社をあげて取り組むべきことですよ。」とおっしゃいましたよ。そちらの資料、5ページ目を見ていただけますか。それは日亜から提示された実施計画です。「もうすでに調査研究を開始しています。」との言葉もあった。日亜から、実施計画は行わないことになった旨、通告があったのは実に2年後のことです。そうやって今回の犠牲者に刻まれた生きる可能性を無視し、わたしが無知な素人だと見くびり、騙したのです。

拝島 うち・・・ウチの社は、いつもそうですよ。客からは文句さえでなければいいと

思ってる。

川路 酒見さん。今回の事故での機長はじめとするクルーについてはどう評価されますか。なぜ、彼らは羽田に戻れると考えたのでしょうか。

酒見 羽田を出てからわずか15分です。帰ることができると考えたのでしょうか。じっさいは帰れますか。

川路 油圧系統がぜんぶダメになっているわけですから・・・まずは不可能です。彼らはそれを知らなかったのでしょうか。

酒見・・・体験不足による、判断ミスではないかと。

川路 海に着床すべきでしたね。

酒見 それで、生存率が上がる可能性はごくわずかです。

川路 このあたりの急峻な山よりですか。

酒見 今回の生存者に関しては・・・斜面を滑り落ちる際のクッション効果があったことも関係しているかとは・・・。

川路 では次も山に堕ちますか。

酒見・・・いえ・・・。

川路 公開されたコックピットボイスレコーダーは、いつのまにか、ガン患者の闘病記録かなにかのように、クルーが必死で生きた、その証としてあがめられていられる。しかしそれは、そんなことのために用意されているものではありません。今回のような事故が起こったとき、あとになっては知りえないことを記録し、緻密に分析するためにあるものだ。宇和田さん、医学的見地からあの記録をどう読みますか。

宇和田 例えば、酸素マスクをつけなかったことによる低酸素状態が認められます。緊急時にも関わらず言葉数が少なくなり、思考力が低下していたのではないかと思われる箇所が何か所か見受けられます。

川路 事故調の報告書は、このことについて指摘してはいる。航空機関士が2度も酸素マスクを着用しようと言っているにも関わらず、機長も副操縦士もそれを行っていない。操縦不能と気づいたあとに、羽田に戻りたいと管制に伝えているのは、判断力が鈍ったことによる残念なミスでしょう。にも関わらず事故調は、「はじめて」だからしようがない、で全て片付けているんです。結果、誰も刑事責任は問われなかった。

岩沼 でもおかしいですよ。これが自動車だったら若葉マークで、はじめての運転だったから、人をひき殺したことは仕方がないなんて、だーれも認めてくれないですよ。ぼくはですね・・・今回のことをはじめた以上、ここから先の航空機事故による犠牲者には、ぜんぶ自分が関わっている、そういう覚悟でやっています。酒見さんも来たからには、覚悟を決めてやっていただかないと、どうにもなりません。

酒見 覚悟でなんとかなるなら、いくらでも覚悟くらいします。

川路 高知沖でのタイ航空の事故、皆さん、もちろんご存知ですよ。

川路 拝島

津村 タイ航空って・・・あれだ。・・・暴力団が密輸するつもりだった手榴弾をうっかり爆発させたっていう・・・。

栞島 事故機の機長の証言では、日亜の事故同様の急な減圧は、操縦室では分からなかったそうです。コンピュータはそれを示していなかった。機長は機関士を客室に行かせ、後方の壁が破壊されていることを確認し、そして、水面への緊急着陸以外に道はないと判断しました。

岩沼 でもあれ、大阪空港に不時着成功したよね。死者も怪我人もなし。神楽の次の年だったからよく覚えてるよ。

栞島 日亜機との決定的な違いは、事故発生と同時に酸素マスクをつけるというマニュアルを守ったこと、パイロットが軍隊出身で、緊急事態に対しての心構えがあったこと。コンピュータの情報に頼らず機関士に機体の状況を見に行かせたこと。たしか油圧系統がひとつだけ生きていたって・・・。

栞島 生存者の数は、247対4、です。死者はゼロ対540。油圧がひとつ生きてたことなんて、そこまでの大差負けを支える根拠にはなりません

酒見 勝つとか負けるとか、飛行機事故を野球かなにかみたいに。口を慎みたまえ。

栞島 この話には続きがあります。その機長は、「あなたはコンピュータを信じなかったのか。」と質問されてこう答えている・・・アイ ビリーブ イン コンピュータ バット ミー ファスト・・・コンピュータは信じている・・・しかし自分の判断が先だ・・・。俺たち逆じゃないですか。自分の判断は信じてる。でも組織が先だ。

酒見 ……。

栞島 酒見さん・・・事故が起こると・・・必ず技術部でいちばん若いのを・・・現場に連れていかれてましたよね。これからいちばん長く日亜にいなければならないものにこそ、現場を見せるべきだと言って・・・。なのに酒見さん。なにをしてたわけですか。あれから5年間・・・ここに足も踏み入れようとしなかったのはどうしてなんですか。

川路 実験で故意に航空機を墜とすことなどできません。この事故は、我々にとってこれ以上はない悲劇であると同時に、貴重な524人の生死に関わる実験記録です。無駄にするわけにはいかない。

酒見 みなさんは日亜がわかっていない。

川路 ふざけないでください。何度も・・・何度も期待させられ・・・裏切られて・・・素人と蔑まれ・・・あるのは無視だけでしたよ。わからないわけが・・・。

桑原 (とつぜん土下座し) すみません。すみません。すみません。

酒見 桑原くん。やめたまえ。

桑原 あやまつとらんですよね。酒見さん・・・ここに来てから・・・一回も・・・あやまつとらんじゃないですか。



酒見 謝ってすむ問題ではないんだ。わからないのかね。

桑原 すみません。……ほんとうに……。ほんとうに……。

黒崎 あのっ……やめましょう……。あの……。そういうの……。やめないと……先に進めないとおもうんですよ。わたしたち……。

津村 あの……。桑原さん……。あのとき、藤岡に来てらっしゃいましたよね。……え。

津村 ぼく覚えてます。おなじ体育館で待ってた方の世話役をされてましたよね。

桑原 ……それは……。あの……。

津村 ……柩にひとつひとつ顔を入れて……。探してみましたよね。怒鳴られたり……。蹴られたりして……。

桑原 いや……。あの……。その。

久美子 相変わらずなのね。

桑原 は。

久美子 言いたいことあるなら言えばいいのに、そうやって飲み込んじゃうから回りがいららするの。だから、もっとうまくやればいいのにな。

桑原 うまくってどんなかんじですかね。

久美子 なによ。

桑原 わからんですよ。わからんです。……よく……。交通事故とかで……。言うじやないですか。タチの悪いのにアテちゃってこつちが被害者だよって……。飲み屋ですわね。「ある意味被害者はこつちだよな」って……。笑うわけです。同僚が……。わけがわからんです。なのに……。なぐりもしない……。お前ら見たか……。あのときの……。藤岡の……。あれを見てないからそんなことを言えるんだと……。言いもしない。それどころか……。あるときですね。ちょうどカウンターの、座ってる横に……。大きな鏡があつて……。わらってるわけです。自分が……。誰もいない自分が……。

栞島 酒見さん。今日、なにをここに来たんですか。

酒見 みなさんの話を聞き、できることはなにかを考えようと思いました。

栞島 自分の立場に支障のない範囲ですか。

酒見 価値のある試みだと思っています。日亜航空として、どこにコミットしていけるかを検討します。

川路 今のお答えでよくわかりました。来たからには共に闘っていただけるものと信じていましたが、ぼくの見込み違いだったということですね。

酒見 そういうことでは。

川路 そう言っているようにしかぼくには思えません。

久美子 ……お言葉を返すようですけど。

川路 なんてしょうか。

久美子 川路さんの言い方は、人にものを頼む態度とは思えません。

川路 どういう意味でしょうか・・・。

久美子 かぐら連絡会が、今回、手を引いたのは、そういう・・・なんていうんでしょうか。

川路さんの合理的で冷たい考え方についていけないと考えたからです。

川路 そういう意見があることは・・・承知しています。

久美子 承知している・・・って、ならどうして改めてくださらないんですか。

川路 改めてこのプロジェクトが先に進むならそうしますが・・・。

久美子 進みますよ。決まってるじゃないですか。

川路 そうでしょうか。

久美子 少なくとも阿久津さんたちが手をひくなんてことはありませんでしたわ。川路さんが理解してくださらないから・・・。

川路 彼女たちがわたしのなにかを理解してくれているとも思いません。

久美子 けつきよく、川路さんにはわからないんだわ。奥様もいらして、立派な息子さんもいらして・・・。これからも悠々自適な人生ですものね。

岩沼 ちよっと・・・やめましょうよ。そういう、自分の悲しみのほうが、相手の悲しみより勝っているなんていうつまらない争いは。

久美子 みんなおっしゃってますわ。川路さんは生甲斐を見つけられてむしろいきいきしているように見えるって。

岩沼 ぼくが・・・いいなあ・・・津村さんとは夫婦揃って、とか言ったらどう思いますか。

久美子 ・・・・浩太がいなかったら意味がないんです。

岩沼 子供ならまた作ればいいじゃないですか。

久美子 なんですって・・・。

岩沼 そう言われますよね？ぜったいそういうつまらないこと言うバカがいるんですよ。ならせめて、うちら同士でそんな言い合の・・・やめましょうよ。

久美子 わたし解らないんです。事故を生かすなんて言ったって・・・向上して得るのはけつきよく日亜じゃありませんか。優良企業になって・・・褒められて・・・誰も死んだひとは帰ってこないって言うのに・・・。

岩沼 じゃああれですか。もう一回、飛行機が落ちたらいい、そう久美子さんは考えるんですか。

久美子 そんなことは言っていないです。

岩沼 でもそういうことですよね・・・。日亜でも全空システムもクラフト社も・・・素晴らしい企業になってくれないと、いつかまた飛行機は落ちるわけですよね。

久美子 そんな・・・。

岩沼 死ぬのが自分の家族以外だったらいいですか。あの光景・・・久美子さんだって、見てるじゃないですか。ぼくは厭ですよ。どこぞの知らんひとでも、たとえ日亜の

川路 連中でも・・・あんな目にあってるのを見るのは・・・ぜったいにイヤです。

川路 岩沼さん。もういいでしょう。

岩沼 え。だって川路さん。

川路 生甲斐を見つけて生き生きとしている、わたしはそれで構いません。

岩沼 いや・・・しかしですよ。

川路 ここに、事故調がまとめた報告書があります。先日の渡米で、この報告書に重大な間違いがあることをわたしは発見いたしました。

岩沼 ちよつと待ってください。

川路 今日はその話を皆さんとするつもりで来たのです。最低限のコンセンサスがな  
ひとの説得のために時間を使うつもりはありません。そんなことをしている時間  
があつたら、その話を踏まえうえで、神代村セミナーをどうしていくかを考えた  
い。

岩沼 いや・・・あの・・・。

津村 岩沼さん、まあ聞きましょう。

岩沼 え。だつてさ。

津村 うちが・・・うちのせいで・・・まあ・・・その・・・なんとかしますんで・・・

川路 あの・・・聞きましょう。

川路 この340ページにわたる報告書のなかで、人間の生死に関してはわずか2ペー  
ジが割かれているのみです。1966年全日本エアラインの事故では、2名の医学  
者が事故調のメンバーに入り詳細な記録を残しています。1982年の日亜航空  
の羽田沖の事故では、数ページに渡って座席ナンバーに対応するカルテのような  
所見が書き込まれていました。しかし、今回の事故に関してはたったの2ペー  
ジです。しかし、そのたった2ページの中に、ヒトの生死に関わる根本的な間違いを  
見しました。耐G・・・つまり人間がどれくらいの衝撃に耐えられるかという単位  
ですが、Gのかかる方向とその継続時間によって変化します。恵理ちゃん、ちよつ  
とここに座ってくれるかな。

黒崎 あ・・・え・・・はい・・・。

川路 人間のこちら側から圧がかかるのと、こちら側から圧がかかるのでは、耐えうる  
衝撃が変わってくるわけです。今回の場合は、ジェットコースターが下るとき  
のように落ちたわけです。その結果、前から相当の衝撃を受けた。報告書には、そ  
ういう場合、ベルトを着用していても、25Gを超えると人間の体は耐えられないと書  
かれている。今回の事故でどれくらいのGが掛かったかはご存知ですよね。

津村 場所によっては数百G、比較的衝撃の少なかつた後方座席でも数十G掛かつた  
報告会では言っていました。だから、後部座席であつても、即死してもあたりまえだ  
と。息子が乗っていたのが前方座席だったので、後ろと前でそんなに違ったんだ、  
と思つたのでよく覚えてます。

川路 ところがそれがとんでもない間違いだったんです。  
津村 え・・・どういうことですか。

川路 事故調査委員会の報告の根拠は、今回講師で来てくれるスチュワート博士の論文です。その原文をわたしは見せてもらいました。そこには、「20から25G程度の衝撃を受けても人は安全です。後遺症を伴うような傷も負いません」と書いてあった。

拝島 え・・・ほんとですか。

黒崎 それ・・・もしかして・・・誤訳ですか。

拝島 話がまるつきり逆じゃねえかよ・・・。

川路 ぼくもまさかそんなハズはと思って何度も読み返してみたけど、25Gで致命傷を負うなんてことはどこを探しても書いていなかった。この部分を誤訳したとか考えられないんだ。

黒崎 そんな・・・酷すぎる・・・。

宇和田 まるきり意味が違ってますわね。

酒見 それはほんとに間違いなんですか。  
川路 念のため、友人の大学教授にもチェックをしてもらいましたが、間違いはないようです。

酒見 原文はいまお持ちですか。

川路 はい。コピーですが。(川路、取り出す)

酒見、それを受け取り、読み始める。拝島近づき覗く。

川路 しかも、スチュワート博士からは、5kgが掛かっても生きたひとがいるという事例があり、衝撃の度合いと人の生死は必ずしも正比例で対応しているわけではない、と言われました。

黒崎 え。5kgって、25Gの何倍・・・。

川路 「事故調査委員会の報告書は、極めて初歩的なミスを犯している」と彼は断言しましたよ。

津村 え。じゃあ、123便に乗っていた乗客は、全員、生きて帰れたかもしれないってことですか。

川路 少なくとも耐G的には可能性があった、ということになりますね。

拝島 実際にはそのほか様々な要素がありますから、そんな簡単にはいきませんけどね。  
川路 それはもちろんそうです。しかし、さきほどお話した航空機の構造、パイロットの判断、そのほか様々なことを掛け合わせていけば、生存の確立はあがりこそすれ、下がることはないでしょう。

拝島 ちきしよう。こんな根本が違ったら、最初っからやりなおしじゃないかよ。

川路 最初から、やりなおさなきゃならないのではなく、最初からやり直す根拠ができた  
と考えるべきではないですか。4人の生還が「奇跡」ではないことをこれでようやく  
証明できる。

酒見 (原文を置き) なぜこのような重要な間違いを……。  
わたし、信じてました。「奇跡」って言葉。今の今まで信じてました。

黒崎 生存は確かに信じがたい出来事でしたね。なぜ自分たちの家族ではなかったかと  
思いながらも、われわれ遺族にとって、あのひとたちが生きたということはあまり  
にも大きい。しかし、そのうつくしさゆえに、奇跡なんていう言葉でくくられて、  
おそらくは誰しもが考えることをやめてしまったのです。けれど科学に「奇跡」は  
ありません。生存は、科学の領域で語られるべきだ。

黒崎 事故に原因があるわけですから、生きたことにも理由がありますよね。わたし……  
なんでそんなかんたんなこと、いままで気づかなかったんだろう。

岩沼 奇跡でもいいんじゃないですか。  
え。

黒崎 なんで奇跡じゃだめなんですか。  
なにをいまさらおっしゃってるんですか。

川路 ぼくは……ぼくの妻はですね。前の席と、ひとつ置いて隣の席のひとが助かって  
るわけです。どうしてうちの妻ではなかったかと……。

川路 だからこそ、生存には根拠がある、その根拠を知りたいとおっしゃっていたでしょ  
う。

岩沼 もちろんそうです。でも、でもですよ。神代のひとたちなんか、神楽は神様のい  
る山だ、だから4人も生かすことができたんだ、って、そうやって大切にしてくれ  
ているわけです。そういうの、川路さんはどう思われますか。

川路 もちろん感謝しています。あたりまえでしょう。  
あたりまえでしょうって……。どうしてそういう言い方になっちゃうかなあ……。

岩沼 まあ、岩沼さん。川路さんも……。  
川路さんから見せていただいた、あのリベットの写真。あの写真みたら、なんか、  
こう……笑ってしまったというか……ずいぶん不器用に締めたな……と……  
工場で、わたしも毎日のようにリベット打ってるワケなんですけど、こう見えて、  
腕はいいんです。オヤジから……見た目がきれいなのがいちばん丈夫なんだっ  
て……そう言われて……ちょっとでも雑にやろうもんなら殴られて育ってます  
からね……。ホッチキスは……。あんまり得意じゃないですけど……。鉄だつた  
ら……。あれよりはマシにやれるんじゃないか。いつこいつこはずして、キチツと  
こう奇麗に合わせてですね……。できることなら、締め直したかったですよ……。  
まあ……。でも実際は……。ガタガタに繋げて、ちゃんと貫通してないところがあ  
った。

川路

ですから、そういうことをひとつひとつやっていこうと言ってるわけです。航空機は、耐空性・・・空を飛ぶために必要不可欠な条件に対し、不断の努力を行ってきた。しかし、破壊されたときに耐えるためには・・・全体の構造のわずか15%しか使用されていない。そのパーセンテージを、一パーセントづつでも、いえ、0.1%づつでも上げていくこと。できることなんて、それしかないではありませんか。

岩沼

わかってますよ。ヘルメットは無駄か。そのための実験はしているか。もし有効だとわかった場合、備え付けることはできないか。2種類の安全姿勢のうち、よりよいものを選ぶことにコストは必要か。現在のライフジャケットは水に不時着した際に有効になるものだ。では、衝撃に対して有効なそれを開発するのは不可能なのか。そのひとつひとつが0.1%だって、川路さんがそうおっしゃるたび、ぼくは感心して、そんな考え方のひとつがいるもんなんだなって。ぼくに役立てることはなかなかって。

川路

なにをおっしゃりたいわけですか。

岩沼

あのリベットは・・・夢のなかでしか、締め直せませんよ。ぼくは・・・なんども夢にみました。妻がですね。ぼくがきれいに締めたリベットを見て、満足そうに笑うわけです。「さすがねえ。」と言って、嬉しそうにカレンダーに赤い丸を書き入れるんです。いつもそこで目が覚める。どうやってもあのボルトは締め直せない。でも新しいものなら、キチツと締めることができるじゃないですか。それしか方法はないじゃないですか。ぼくはそういうことを川路さんから教えてもらったと、思ってるんです。

川路

なんでそういう話になるんですか。わかりませんね。

岩沼

わからないかなあ・・・。奇跡ではない、ってことひとつとっても川路さんみたいな言い方しちゃったら、それを信じて信じてやってきたひとは、やりきれない思いになるって、そういう話です。さっき、ひとりでもやるって、断言されて、ぼくはさみしかったですよ。結局のところ、ぼくのことなんかアテにしてもなければ、信じてもない。

川路

そんなつもりはありません。

岩沼

信じてるようには思えないですよ。ぼくのことでも中心メンバーだって言うのなら、事故調の報告書の間違いも、酒見さんが来ることも、なんでひとこと相談してくれないんですか。

久美子

そういう方なのよ。いまにはじまったことじゃないですわ。

岩沼

川路さん、おっしゃってたじゃないですか。航空機は専門ではないけれど、娘の死については第一人者だ。ぼくにはその責任があるって。ぼくはほんとにそうだなあって思ったんですよ。でもそれだったらぼくは妻の死に関しては、専門家です。津村さんも、恵理ちゃんも、みんなそうですよ。

久美子 もうほんとにおひとりであればいいんです。そうすればいいんです。

岩沼 いや。そういうことではなくて。

久美子 でも。

津村 いいから。

岩沼 あのですね。技術もそうかもしれないですけど、みんなの気持ちだって、0・1%づつしか進めないってことだと思っんです。ぼくは、そういうことを大切にしながらやっていたいんです。そして、ぼくにもリベットの締めなおさせて欲しいんですよ。

川路 もしほんとにそう思われるのなら、岩沼さんももう少し、勉強されたら如何ですか。え……。

川路 こういった資料も、すべてぼくに任せっぱなしで、ご自分で検証しようとしてもしない。もしぼくが間違っていたらどう責任を取るんですか。

岩沼 ……やっぱり信じてないじゃないですか。

川路 助けていただいていることはいつも感謝しています。でもそれとは別に、向上心を持っていただきたいと、どうしても思ってしまうんです。

岩沼 じゃあ、なんで、ぼくを共同発起人なんかにしたんですか。意味がわかりません。もうついていけませんよ。

と、出て行きそうになる岩沼。

いままで全てを静観していた松尾がおもむろに一枚の写真を撮る。

津村 君……。なにするんだ。

松尾 ……写真を一枚……撮らせていただきました。

津村 出してください。

松尾 ……。

津村 フィルムを出してください。

松尾 ……。

津村 あのとときも、君らが蟻みたいに群がってくるから、体育館の窓を全部塞いで、それでも窓まで這い上ってほんの隙間から撮ろうとして……落ちて……それでも飽き足らず白衣を着てもぐりこみ……いつのまに写真を撮った……報道の自由、報道の自由って……そんなものがそんなに偉いんですか。

松尾 いや……偉くないですね。

拝島 あの……えーと……松尾さんだっけ。

松尾 はい。

拝島 どういうつもりなのかな。

松尾 今日は貴重なお話を聞かせていただいて感謝しています……。

拝島 なんだって。

津村 (軽く制して) 帰ってもらえるかな。

松尾 できたら最後まで、話を聞かせていただきたいのですが。

津村 理由を聞かせてくれませんか。邪魔はしない、という言葉を通じて、立ち会ってもらったんです。

松尾 こういった記事を書く場合・・・立ち会いまして・・・最後に一枚、写真を撮ればいいわけです。並んでいただいて・・・しかし、そんな記念写真みたいな写真を撮っても、結局はなにも伝わりません。

拝島 だからと言って、今、撮るのはおかしいだろう。

松尾 写真を見て判断してください。

黒崎 その言い方じゃ、わからないです。

松尾 ……。

黒崎 その言い方じゃ、ぜったい伝わらないと思います。

間

黒崎 わたし・・・航空安全に関する知識をひとつ、勉強してきましたんです。聞いていただけますか。

岩沼 え・・・ああ。

黒崎 ある専門家が調査したところ、長く無事故を続けるクルーには、条件があるんだそうです。あの・・・(緊張の面持ちだがしっかりと)①航空への深い関心 ②運転技術向上への意欲 ③そのためのたゆまぬ努力 ④ユーモアのセンス。⑤他者に対しての深い関心。

一同 ……。

黒崎 みなさんいろんな思いできてらしやると思います。(久美子に)わたしを受け入れられない気持ち、わかっています。でも、わたしは、守りたいです。姉が命がけで守ろうとして、守れなかった大切なものを、守りたいんです。

松尾、カメラを開けて、フィルムを取りだす。

フィルムを川路に渡す。

間

津村 川路さん。あの・・・。

川路 なんてしょうか。

津村 いや。あの結局はぼくたちが・・・ちゃんと話し合ってから来なかったから・・・



川路さんにも、岩沼さんにも余計な軋轢を……。

岩沼

そんなんじゃないよ。これはぼくと川路さんの問題だから。

津村

彼女もよく解っているはずなんです。ただ……どうしても浩太のことがうまく……解決できないのです。体も心も……回復せず、薬が手放せません。そして、それは……その……ぼくのせいなんです。

久美子

え……なに。

津村

……浩太は……浩太が死んだのは……ぼくのせいだ。そうだろう。君は……ひとりで飛行機に乗せるのはいやだとなんども言った。なのに……ぼくが……男の子なのだからいいじゃないかそれくらいは……行かせてやれよと半ば強引に認めてしまった……そのせいで……たったひとりで……30分間……。なんで……なんで、いまさらそんなことを言うの。

久美子

津村

いや……だから……。わたし……言ったことないじゃないですか。そのことで……あなたを責めたことなんか……。

津村

じゃあなぜだ。ぼくがこうやって……このセミナーに関わるたび……塞ぎこんで……あなたはいいわね……やることがあつて……つて。

久美子

津村

なあ……久美子……ぼくが殺したんだよ。呑気に……行かせてやればいい……と言った。飛行機は墮ちないもんだと……阿呆みたいに信じていた。ぼくが殺した。浩太を……。なんとかしてやりたいんだ。これからでもなんとか……。

久美子

津村

(皆のほうに向きなおり)……息子の姿は無残でした……。衣服の一部でようやく確認されましたが、血液型の判定もなかなか難しいということとで、ずいぶん待ちました……菌型も持つて行きましたが、肝心の菌がありません。しかし……血液検査を待つ間に、息子の……歯ではないかというものが……見つかりました。それは……その……知らない男性の……ちようど心臓のあたりに埋まっていたそうなのです……。これがどういふことか……。

宇和田

……抱きかかえられていたのかもしれないね。

津村

たぶんそういうことではないか……と……担当の医師の方から説明がありました。

宇和田

……今回のご遺体には……お母さまと……子供さんが……ひとつになつてしまったようなものが、少なからずありました……。おそらくは最後の一瞬まで抱きしめられて……。

津村

隣の席の方は……出張帰りのサラリーマンの方でした……夏休み中のことで……息子は楽しみにしていた窓際の席が取れなかったのですが……遺品となりましたカメラの中から……窓を背景にした息子の写真が……。隣の方が……もしか

したら席をかわってくれたのではないか……。そしてこの最後の写真を撮ってくれたのではないか。その際に……。人懐こい息子が……。夏休みにひとりで飛行機に乗っていると自慢している……。そんなふうな光景が……。浮かんでしまつて仕方がありませんでした……。そして……。最後は……。見も知らぬうちの息子を……。抱き抱えて堕ちていったのではないか……。と。

宇和田

……。

津村 何か月かたち、その方の奥さんからお電話がありました……。ちょうど、同じ年くらい……。息子さんがいらつしやるそうで……。子煩悩なひとだったので、きつと最後まで守ろうと……。していたハズですと……。ほんとうの親御さんのかわりには……。なれないかもしれないけれど……。と……。かえつて励ましていただいで……。

宇和田

……。

津村

宇和田さん……。

宇和田

……。はい。

津村

ぼくは……。聞きたいと思います。それがどんなに凄惨な話であっても……。聞かせていただけるものであるなら……。ぜひ講師を引き受けてください。

宇和田

はい。そのつもりでおります。

津村

川路さんも、岩沼さんも……。あの……。

津村久美子、耐えかねたように立ち上がり。

久美子 わたしはイヤ。わたしはイヤよ……。そんなモノかなにかみたい浩太が扱われるなんて……。わたしの……。浩太を……。そんな……。。(泣き崩れてしまう)

津村

(肩を抱えて) 出ようか。

久美子

いや……。

津村

……。え……。なに。

久美子

ここにいます……。最後までいるの。

津村

……。

久美子

わたし……。聞くんだからああああ(子供のよう泣く)。

岩沼、タオルを津村に渡す。津村、目礼し受取る。

宇和田

……。津村さん……。

久美子

……。

宇和田

モノだなどと……。わたし……。思っています。思えるわけが……。わたしが見た、いちばん痛ましいご遺体は……。女性器が……。背中の皮につながれてある、

ただそれだけのものでした。それでもその部分から、それが子供を産んだことのない若い女性のものであるということが解り、声もありませんでした。なのに・・・そのちいさな一部が、ただ健気で、ほかのなにものでもない女として生を受けたのだと叫んでいるようにも思え、どうしようもなくいとおしかった。生かしてあげなければ、なんとしても生かさなければと。それにはどうすべきかということを開いていくしかない。そのためには、ご遺体をいちど「モノ」として、見つめ、数字やデータに還元して・・・考えていくことが医師の責務ではないか・・・。そう考えました。

久美子

・・・。

宇和田

教えていただきました。ご家族には見せられないという医療者の思い込みがどれほど尊大なものであったか。右手首だけになった旦那さまをようやく発見され、乳飲み子のように胸に抱かれた方・・・娘さんの焼け焦げて半分だけになった頭部に頬ずりをされていた方・・・医師として・・・どれほどの思いを抱いたとしても、ご家族のわりにはなれないのだということ、あのと時のご遺族の姿に、教えていただいたと思っております。わたしは、ご家族にはできない仕事をしてまいりません。それしかできないと・・・あの場所で・・・思い知らされたんです。

久美子

・・・こうちゃんがね・・・。

津村

え。

久美子　　こうちゃんが・・・昨日・・・夢で・・・ママ、神楽に行こう・・・って・・・行こうって言ったのよ。だから・・・来たの。だから・・・帰れない。帰れないのよ。う・・・。

津村

よし。ここにしよう。・・・大丈夫。ぼくがついているから。

津村、久美子を抱えるようにして椅子に座らせる。

間。

岩沼

・・・川路さん、話してくれましたよね。アメリカの報告会では、潤沢な資料があり、開かれていて、聞けばなんでも教えてくれるって。

黒崎

日本とはずいぶん違うんですね。

川路

・・・あまりの違いに驚いて担当の女性に伝えるとね、彼女はきよとんとしていた。税金で行っていることなのだから、皆が知りたいということはすべて教える義務がありますと当たり前のように言っていたよ。

黒崎

凄いですね。

川路

でも、そんなアメリカにも問題はあってね。安全推進派と航空会社が敵同士で、対立したきり妥協が見られないから、どれほどの知識がたまっていこうと実現できない。

岩沼 だけど、日本であれば、日本人の性質をもってすれば、航空会社、政治、そして遺族が協力しあいながら、航空の安全を向上させていく、そんな協調的な体制が可能なんじゃないか。

川路 ……。

岩沼 川路さんが言ったんですよ。

川路 ……。そうでしたね。

黒崎 行きたいですね。アメリカ。

岩沼 そうだね。英語、覚えてね。

川路 行きましょう。いつか、必ず。

酒見、レポート用紙を一枚とり、そこに名前と住所を書き入れ、  
印鑑を押す。

拝島 なんスカ。

酒見 もしもこの誤訳が真実だしたら、見なおされるべきたいへんな事態です。しかし、ただ陳情を提出したところで、日亜はそれを無視するでしょう。神楽の事故で、ひとり面倒な遺族がいる、そのような噂が、わたしのところにまで届いている。陳情には署名を添えるべきでしょう。それもなるべく多く。講師はお引受けできません。そのような立場にないということもありますが、なによりも、いまは日亜に留まることを、わたしは選びます。

酒見、 出て行く。

桑原、 はじかれたようにレポート用紙に近づき、署名する。

桑原、 ハンコまで几帳面につき、おじぎをして続く。

津村 えーと。あの。

岩沼 なに。

津村 弁当でも食いましょうか。

岩沼 はあつ。津村さんどうしたの。

津村 なんかも腹へっちゃって。減りませんか。

岩沼 なんだなんだ。らしくないなあ。

津村 いや。せつかく智くんが持つてきてくれたのに、そのまま返したら失礼じゃないですか。

岩沼 え……でもさ。

津村 たぶん、鮎もあるはずですよ。ぼく見ちゃったんですよ。奥さんが焼いてるの。

岩沼 ……鮎か……そりゃいいね。

津村　　ここらへんのは天然ですよ。そうそう食べるもんじゃないですよ。  
岩沼　食つといたほうがいいんですよ。食べるときに。ねえ。宇和田さん。  
宇和田　・・・そうですね。それは・・・ほんとうにそうですね。  
津村　　そうだ。外で食いましょう・・・山を見ながら。  
岩沼　　山か・・・いいですねえ。そんなに今日は暑くないし。  
拝島　　俺、運びますよ。  
津村　　え。いいよ。  
拝島　　山で鍛えてますから。  
岩沼　　よし。行こうか・・・いや・・・その前に・・・。

岩沼、レポート用紙に名前を書く。  
津村も書く。拝島も。  
そして弁当を持って出ていく。

川路　　（出ていきかける久美子に）久美子さん。  
久美子　　なんでしょう。  
川路　　娘は・・・娘は・・・いつも笑っていましたよ。石頭よねえ。学者さんは、ほんと傷つくわあ、と。  
久美子　　ほんとですよ。  
川路　　困ったものです。

久美子、レポート用紙に名前を書く。  
黒崎、思い切ったようにレポート用紙に近づき名前を書く  
久美子、出て行く。黒崎が川路に近づく

黒崎　　いつも憎まれ役を買って出てくださいって・・・。  
川路　　そんなつもりはないよ。  
黒崎　　でもそんなことなくても、もう大丈夫です。  
川路　　・・・。  
黒崎　　大丈夫にしたいです。わたし、ここまで来ました。来られました。神代村まで。  
川路　　ひとりで。だから・・・。  
川路　　・・・。  
黒崎　　あの・・・わたし、スチュワーデスになろうと思うんです  
川路　　え。・・・ほんとに  
黒崎　　はい。  
川路　　そんなのお母さん、許さないでしょう。

黒崎 説得します。帰ったら

川路 ……

黒崎 同乗されていた方のテープレコーダーに、姉の声が録音されているのを聞きました。赤ちゃんをお連れの方はしっかり抱いて足をふんばってください。テーブルはしまわれていますか。救命胴衣はつけられましたか……。冷静な声で……。うつくしいと思いました。それは、たしかに分析すべき事故の記録です。でも……。わたしにとってはやはり……。姉の……。最後の命が刻まれたものもあるんです。

川路 ……恵理ちゃん。

黒崎 はい。

川路 娘の最後の電話はぼくがとったんだ。

黒崎 そうなんですか。

川路 ふだんは電話なんか出ないんだけど珍しくね。『今日の夜には帰ります。』と言ったのに、それきり帰って来なかった。

黒崎 はい。

川路 さつき、スチュワーズになる、と言われてね、情けない話だけど、それだけは勘弁してくれ、ととっさに思ったよ。

黒崎 ……

川路 でも黒崎さんなら……。君のお父さんなら、しっかりやりなさい、と言うんだろうな。

黒崎 ……ありがとうございます。

松尾、黒崎の顔にピントを合わせシャッターをひっそりと切る。

黒崎 え……。やだ。

松尾、頭を下げ、出ていこうとする。

黒崎 きれいに撮ってくれましたか。

松尾 いや……。どうかな。

黒崎 え。そのカメラ、ただの伊達ですか。

松尾 まあ……。そうとも言える。

黒崎 知ってますか。きれいなが……。いちばん正しいんですよ。ね。岩沼さん。

黒崎、ペコリと頭を下げ、でていく。

松尾、出ていく。

残される、川路。

エピソード 2006年 日亜航空 安全啓蒙センター

立っている川路と酒見。

川路 さつきザツと拝見しましたよ。

酒見 ああ、展示ですか。

川路 ええ。

酒見 見せられるものは、あれで全部です。

川路 ……そうですか。

酒見 ええ。ずいぶんと喪ってしまいました。いや。捨ててしまったというべきか。今だ

海の底に眠っているものもある……。

そう。捨てた。捨てさせてしまった。

川路 こちらの……そう認識不足です。そう言って返るものでもないのですが。

酒見 その言葉を聞くことができただけでも……まあ……ね。

川路 ……ずいぶんお待ちさせて。

酒見 ええ。待ちました。ずいぶんと待ちましたね。あれからでさえ……16年……。

酒見 ……そうですね。

川路 足りない分は、あなたの言葉で。

酒見 責任重大です。

川路 期待していますよ。

酒見 いざとなったら真白になりそうだね。

川路 しっかりしてください。

ふたりやや笑う。

酒見 ふたつめの展示室のほうはごらんになりましたか。

川路 いや……。

酒見 ちいさな展示室なのですが……そこには……神樂のあとに起きたいくつかの飛行機事故の記録を収めました。その中には、神樂の事故後、油圧系統の不能について何度もシュミレート訓練をしたため不時着に成功した事故機の記録も含まれています。

川路 ……。

酒見 このセンターができたことで……さらに先にすすめるように。

川路  
・・・そうですね。

と、扉があき、桑原が顔を覗かせる。

酒見  
時間かね。

桑原  
はい。みなさんお待ちかねです。（川路に）おひさしぶりです。

川路  
ああ。元気にされていますか。

桑原  
はい。おかげさまで。

酒見  
（川路に）では行きましょうか。

川路  
ええ。

桑原、先に出て行く。

酒見、それに続く。

川路、やや残されるが、出て行く。

暗転。